

令和 7 年 8 月 5 日

浜田市議会議長 様

議員名 柳 楽 真智子

研 修 受 講 報 告 書

下記のとおり研修を受講したので報告します。

記

1. 研修名

豊中市型コミュニティソーシャルワーカー実践研修会

2. 受講の目的

地域共生社会を目指す中で、浜田市においても官民連携の重層的支援体制整備が進められようとしている。地域包括システムの「豊中モデル」の中で、大きな役割を果たしている豊中市社会福祉協議会の取組については会派視察で調査を行ったが、机上では得られない実践に基づく調査によって、執行部により具体的な提案を行うため。

3. 期間（移動日を含む）

令和 7 年 7 月 20 日（日） ～ 令和 7 年 7 月 22 日（火）

4. 経費 59,430 円

（経費内訳 受講料 10,000 円、旅費 26,630 円、宿泊費 22,800 円）

5. 研修のポイント・議員活動や市政への反映など

住民を巻き込んだ見守り体制を構築し、ひきこもりや孤立・孤独を防いで社会と繋ぐため、一人一人に応じたきっかけをつくる支援が行われている。その支援の輪に地域住民が積極的に関わっていることは、協働のまちづくりを推進している浜田市にとって重要なことである。重層的支援体制の整備ができる限り早く進むよう提案していきたい。

6. 研修内容

（詳細は別紙のとおり）



テーマ 「誰一人取り残されない地域をつくる」

～住み慣れた地域で暮らし続けるために私たちができること～

- 取組の核となっているのが、コミュニティーソーシャルワーカー（CSW）・生活支援コーディネーター・重層的支援体制整備の取組である。
- 30年前の阪神淡路大震災の時に隣近所の知人は助け合ったが、他の人はほったらかしになり孤独死があった。住居は確保できても繋がりが無く孤立することで孤独死が増えた。これを機に見守りの必要性を感じた。
- 38地区で8,000人の住民ボランティアがおり、大阪北部地震の時は4時間で、12,000人の安否確認ができた。
- 年2回の避難行動要支援者の避難訓練を行っている。
- 地区社協には防災協力員も2名ずつ配置し、人が足りない時はボランティアを募集して補充している。
- 災害時に「無事です」カードを玄関ドアの外に貼り出すことで、安否確認を効率よく行うことができる工夫がされているほか、「とよなか安心キット」を配布して緊急時に必要な連絡先や持病、かかりつけ病院などを記載したカードを筒に入れ冷蔵庫で保管することで、救急搬送時などに役立っている。



- 80代の父親と50代の娘が自宅で亡くなっていた事件はニュースでも大きく取り上げられ、数年前に亡くなっていた父親の年金の不正受給ではないかとの疑いもあったというが、娘自体に障がいがあったのではとも。このような事件を重く受け止めて二度と起こさないために、地域住民による見守りローラー作戦が始まった。
- 民生児童委員を中心に行う中で、民生児童委員が一人で行けない家があることが分かったため、CSW、包括支援員などと一緒に回るようにした。
- 生活保護の場合、その人だけを対象として見るのではなく、支援してもらうために地域の人へのアプローチも必要である。
- 地域から見て困った人は、困りごとを抱えている人。その困りごとを相談できる場所があることが大切である。様々な社会保障の仕組みが有ることを知ることとも必要であるが、中学校で社会保障を学ぶ時間は1時間だけである。

○周りから見て困った人は、色々な事情を抱えていることが多い。その人を知ることによって優しくできることもある。

○8050問題では、親が元気なうちは何とかなるが、親が亡くなったり施設に入った場合に残された子はお金の出し入れさえも難しい場合がある。その対応として、「8050 まるごと支援プロジェクト」や「8050まるごと相談室」を設けている。

○支援の流れ

発見 ⇒ アウトリーチ ⇒ 相談支援 ⇒ 参加支援 ⇒ 地域づくり

○喜ばれる支援であることが大切であり、信頼関係のないアドバイスはクレームと思われることもあるので、信頼関係を作ることが必要。

○定年後の特に男性の孤立が多い。活躍の場を作り出すことで、支えられる側から支える側で活躍できるようになる。

○「豊中び〜のび〜の」はひきこもり当事者の支援施設で、生活保護に繋がりやすい人たちの居場所にもなっている。居場所で作ったものを販売して活動費に充てている。ひきこもり当事者宅を訪問した際、庭先でメダカを飼っているのを発見。び〜のび〜ので販売してほしいと要望したことで居場所に出てこれるようになった。

○訪問時に絵が上手なことに気付き、壁面アートを提案したことで6年ぶりに外出できるようになり、一人で描くのではなく不登校の子どもたちと一緒に描いてもらうことで双方の繋がりもできた。

○誰かとどう出会うかが大切。できるところにアプローチすることが大事である。相談支援を受けている人にもできることがあるし、やってもらって役割を持ってもらうことも必要である。支援から社会参加へ。

○校区福祉委員会

- ・小学校区ごとに地域の各種の協力を得て自主ボランティア組織が設置され、なんでも相談を通じて把握した校区内の福祉問題の解決に地域住民とともに取り組んでいる。
- ・配食サービス、ミニデイサービス、サロン事業、ボランティアの育成・登録を実施。

○豊中あぐり

- ・都市型農園を拠点に人の交流と社会参加を促進（中高年男性を中心に）し、地域福祉の担い手づくりを目指している。

○福祉なんでも相談窓口

- ・ボランティア（校区福祉委員、民生・児童委員）がどのような相談でも受け止める。

○CSW（コミュニティソーシャルワーカー）

- ・社会福祉協議会のCSWが専門的観点から住民活動をサポート。
- ・住民と協働しながら地域のニーズを把握し、必要に応じて関係機関や広域のネットワーク会議等に繋ぐ。

○地域共生社会への新たなステージ

- ・一人も取りこぼさない SOSを出せない人に届く
- ・排除から包摂へ 総論賛成各論賛成へ
- ・支えられる人が支える人に
- ・すべての人に居場所と役割を

徹底した本人尊重と力が発揮できる社会づくり

- ・ それを支えるための丸ごと

断らない福祉

他機関協働

- ・ 福祉が町おこし

- ・ 社会的孤立への対応



○スウェーデンでは子どもの頃から教育で、困ったら役所に行きなさいと言われているから困ったら役所へ行く。困っている人に対する理解をどう進めるか、そこが変わらなければ進まない。困ったらSOSを出していいんだよという体制を作ることが大事である。

○重層的支援体制には住民も含むことが大事である。

【所感】

会派視察の際に今回の実践研修会の開催を聞き、住民を巻き込んだ取組について実際に関わっている方たちの現場を知ることが大切と考え参加した。ゴミ屋敷当事者宅の訪問を想定した対話の実践や、社会資源の開発の際にどこにポイントを置くかなどワークショップの中で考えることができた。2日目には東岡地区で見守り活動を行っている地域住民と意見交換を行い、住民同士の支え合いの意識の強さや心の温かさを感じた。都会地ならではの高層マンションやセキュリティが厳重なマンションへの訪問の難しさや、ボランティアの高齢化や担い手の減少などの課題を聞いた。訪問の同行では90代の女性宅に伺い、見守りに対する安心感はもちろんだが、自身も同じ団地内の高齢の友人とお互いの安否確認も行っておられ、人の繋がりが大切にされていることを実感した。玄関ドアの内側には「無事です」カードが貼られ、必要な時にすぐ貼り出せるよう用意されていた。この日もなんでも相談に数名の相談者が来られており、この拠点が住民の安心の場所になっていた。

ひきこもりや孤立・孤独が問題となっている中で、一人ひとりの状況に応じた支援が大事であり、社会参加に繋げるための仕掛けを作り出すことが重要と感じた。講師の話にもあったように、重層的支援体制整備には住民の参画が必要なことから、協働のまちづくりと絡めながらの取組を提案していきたい。